

ESD レポート

Education for Sustainable Development

ESDとは「持続可能な開発のための教育= Education for Sustainable Development」の略。社会、環境、経済、文化の視点から、人類が直面するさまざまな課題に取り組み、公正で豊かな未来をつくる「持続可能な開発」——それを実現する力を、世界各地に生きる私たち一人ひとりが学び育むことを目指して、「国連持続可能な開発のための教育の10年 (ESDの10年)」が、2005年からスタートしています。

食べる力は、生きる力。「食」は、私たちにとって、もっとも身近な自然であり、もっとも原初的な営みです。「食育基本法」なるものが制定され、なにをどう食べるかが問われているいま、持続可能な社会づくりの視点から、「食」とおした人と自然、人と人との関係づくりを探りました。



特集

地域発ESD その4



「食の教師」は地域のおばあちゃん。畑も台所も知り尽くすのは、農家のお母さんたちだけだ。「孫のために私たちにできることがあれば……」。そんなおばあちゃんたちの思いを引き出し、わが母校の応援団に引きずり込もう。(⇒2頁)



家庭の食卓とお店の食卓だけが、現代人の食を担う場なのか？商店街の空き店舗や、温泉街の一角、子育て支援センターなどに、誰もが安心して食事をとることができる場をつくる。いま、食を核としたコミュニティづくりが静かに広がっている。(⇒3頁)

目次

特集 地域発 ESD 3

- かみへばる…………… 2
- こくぶんじ…………… 3
- DESD日本実施計画最前線 …… 4
- アジアESD交流レポート …… 4
- 地域の動き…………… 5
- 国際的な動き…………… 5
- ESD とつながろう
- ESD を読む会報告 …… 6
- ESD に期待します！ …… 6
- 私がESD-Jに入ったわけ… 6
- ESD を知ろう
- ESD 基本用語集 …… 7
- ESD 関連の本 …… 7
- ESD-J だより …… 8

2005年9月15日発行

NPO 法人
「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議



「みそこし応援団」が、ふるさとの子どもを育てる

「食」をとおした学社連携

かみへばる
福岡県八女郡 立花町立上辺春小学校前校長 石本 勉

◆「みそこし」とは？

「みそこし応援団」とは、農家のお母さんたちを中心とした、学校支援組織です。2002年に結成。当時、上辺春小学校は県の給食研究校に指定されていましたが、給食の準備や後片付けといった一般的な給食指導の範疇では本質的な食生活改善には結びつかない、という課題を抱えていました。家庭や地域と本気で連携し、子どもたちの食生活を地域ぐるみで改善するにはどうすればよいのかを考えるなかで、「みそこし応援団」の構想が浮上したのです。

「食べる」ことは、人間が生きるうえでの原初的な営みです。ヒトの歴史は、食べものを「みつける」ことから始まり、次第に作物や家畜を「そだてる」ようになり、その過程で調理加工して「こしらえる」技を磨き、礼儀や作法にのっとり「しよくする」文化を根づかせてきた、といえます。これらキーワードの頭文字をとって「みそこし」と命名しました。「食文化」というと大所高所からの知見を披露しなければならぬように聞こえますが、地域のお母さんたちに、「山菜やキノコを『みつける応援団』になってください」「米や野菜を『そだてる応援団』になってください」とお願いすれば、本当に広い分野から多彩な人材が学校を応援してくれるだろうと考えました。

◆どのように応援団を組織化したか

4月にまず、学校だよりや回覧板を使って「みそこし応援団募集」の案内を全戸へ何度も配りました。

5月20日には20の方が集まり、「第1回みそこし会議」を開催。そこでみなさんの賛同を得ると、5月末に「第1回みそこしサミット」を開催しました。応援団の方たちの手料理を体育館に並べ、つくり方やその背景を、子どもたちや教師に語っていただくというものです。特産の筍料理や松尾地区にしかできない「弁財天コンニャク」、この地域が発祥といわれる「おにのてこぼし」など、上辺春の食文化が一瞬にして子どもたちの前に立ち現われました。「私たちも梅料理をつくりたい」「弁財天コンニャクをつくって、おいしさの秘密を探りたい」など、子どもや教師にとっての学習課題がはっきりとしたのです。

そこで、数人の教師で一年間の学習計画を一気につくり、各学年がそれぞれの分野の応援団員の方たちとともに学習を重ね、9月の「第2回みそこしサミット」にこぎつけました。

◆ゲストティーチャーでは不十分

一方、応援団の方たちも、毎週のように会合をもったそうです。「『おにのてこぼし』は上辺春が発祥と聞くが、どげんふうにはじまったか調べてみようか」「竹は何種類植えとった？ モウソウ、マダケ、ハチク、シラタケ、チンチク……。2月から6月まで順々に筍がでてくるようになってほしい」と、自身の暮らしを見

つめ直す作業を重ねていきました。11月の研究発表会（「第3回みそこしサミット」）では、子どもたちの発表のほか、応援団による「みそこし食堂」を開店し、200名にのぼる教員や栄養士、教育関係者をして「こげんぜいたくなものは初めて食べた」と言わせました。

近ごろ学校では、「人材活用」や「ゲストティーチャー」と称して地域の方に授業をしてもらう機会が増えましたが、学校からの依頼で地域の方がバラバラに来るだけでは不十分と感じます。学校と地域先生の関係だけでなく、地域の人たち自身のつながりをつくることに、「応援団」の大きな意味があると考えます。そこに、ふるさとの子どもを育てる気風が生まれます。数年で職員が異動する学校だけでは、明らかに限界があるのです。

「ふだん何気なくつくっていたものの豊かさに気づかされた。それを孫の世代に伝えるという新しい役割をみつくて、これからの地域がいとおしくなった」とある方が語ってくれました。現在「みそこし応援団」は、町の「地域振興会議」の一員にもなり、学校とのつながりをもった地域おこしの実行部隊として、活躍の場を広げています。



「みそこし応援団」といっしょにつくった粟料理を給食で味わう。

石本 勉

(いしもと つとむ)

1949年、鹿児島県大口市生まれ。鹿児島大学教育学部卒業後、大口市農協に就職。ライスセンターや、育成牛の牛舎建設事業の企画・立案などを担当。5年間の農協勤務の後、福岡県にて教員となる。2002年度から3年間、八女郡立花町立上辺春小学校校長。「みそこし応援団」を立ち上げる。今年度からは、山村留学で有名な星野村立仁田原小学校校長。農協勤務時代に農家や稲、牛とつきあうなかで培った「農は国の手本」の精神が、現在の教育実践に生きていけると感じる。



「コミレス」で地域を変える

楽しく働け、おいしく食べれる、くつろぎの場

東京都国分寺市 (特非) NPO 研修・情報センター 世古 一穂

■「食」を核に地域を再生する

「今日は大根丸ごと使って、いろんな料理をつくりましょう。皮はきんぴら、身は細く切ってサラダと大根のフライに」「えー!!大根の皮も使うの?」「大根のフライってはじめで」「マヨネーズって自分でつくれるの?」。コミュニティ・レストラン「でめてる」で行われる「コミレス講座」でのエコクッキングのにぎやかな一場面です。

近ごろどの駅前や街を歩いても、全国チェーンのコンビニ、ファミレス、居酒屋、ファーストフードの店ばかりが目立ちます。町の個性が失われ、街角から地域とのつながりが失われています。一方で、駅前のシャッター街、引きこもりやニートの出現、孤独なお年寄りの増加など、全国どここの地域も同じような問題を抱え込んでいます。

こうした地域を再生していくひとつの方策として私は、食を核としたコミュニティづくりの場、「コミュニティ・レストラン」プロジェクトを、1998年から(特非)NPO研修・情報センターの事業として展開してきました。NPOなどが運営母体となり、地産地消やエコクッキングによるメニューで、地域の人たちが安心して食卓をとともにできる、コミュニティづくりのためのレストランです。略してコミレス、「楽しく働け、おいしく食べれる、くつろぎの場」が、コンセプトです。

■食育、自立支援、循環型社会づくりの場として

2005年9月現在、北海道から福岡まで、30以上ものコミレスとコミレスに準じた取組みがあります。

全国各地のコミレスは、たんなるレストランではなく、「地域循環型社会づくり」「コミュニティの再生」「女性や地域弱者の雇用の場づくり」「不登校児の出口づくり」など、地域それぞれの課題を、コミレスの実践のプロセスをとおして図ろうとします。

当センターでは、コミレスの機能を下記のようにとらえ、右に掲げた5つの実践に整理しています。たとえば地域によっては高齢者の集いの場になるなど、コミレスがコミュニティセンターの役割を果たすし、エコクッキングのプログラムを地域の子どもや大人に提供することで、楽しい環境教育や食育の場として機能します。またコミレスでは、配膳・調理・接客・洗い場など、個性や能力に応じてさまざまな役割を務めてもらうことが可能です。つまり、障害者雇用や不登校時の職業訓練など、自立支援のための場としてもびったりなのです。

なお、どのコミレスも食と調理の考え方はエコクッキングを基本としています。それも、たんなる廃物利用でなく、その地で採れたものをその地で使う「地産地消」、その地のものをその地で食べる「身土不二」、旬のものを旬の時期に食べる「旬産旬食」、食材をまるごといただく「一物全体」をもとに、循環型社会づくりにふさわしいライフスタイルをつくる方策と捉えています。とくに食育や環境教育、循環型社会づくりをテーマに活動している「コミレス」はエコ・コミュニティ・レストラン、「エコレス」と呼んでいます。

たとえば、石川県加賀市のエコレス「はづちを」では、国から助成を受けて建設した地域交流施設

～コミュニティ・レストラン5つの実践～

1. 地産地消をすすめます
生産者の顔が見える食材の活用 / 地域食文化の再発見と継承 / 旬の食材を優先に使用
2. 健康づくりを応援します
食育の場 / 安心安全な食事の提供
3. 地域の食卓・地域の居間をめざします
共食の場 / 地域課題への取組みの場 (食を通じた子育て支援、高齢者・障害者の自立支援など)
4. 誰でも安心して利用できます
バリアフリー、ユニバーサルデザインを基本 / 一人でも気軽に利用
5. 循環型社会づくりに取り組みます
エコクッキングの実践 / 食材を丸ごと使用 / 地域資源の活用

● コミレスホームページ <http://www.comiresu.org/>

を、朝食専用のコミレスとしても活用して、高齢者の介護予防のために活かしています。茨城県水戸市の「とらい」では、高齢者が集うコミュニティ農園の無農薬野菜を、うまくコミレスの食材として活用しています。

■「コミレス」づくりに参加を

こうしたコミレス・プロジェクトは、海外からも注目され、2003年には、米・バークレー市の「エコロジー・センター」と当センターとの間で、食を核とした地域循環社会づくり、エコライフについて互いのノウハウを交換し合う「日米エコ・コミレス協働プロジェクト」を実施しました。

当センターでは、コミレスのポリシーやノウハウを広く知ってもらい、コミレスをNPOとしてきちんと運営できるようにと、全国各地でコミレス公開講座やエコ・クッキング研修会を、毎年数多く開催し、各地のネットワークをすすめています。

「私もそう思っていた」「コミレスをやってみたい」と心ときめいた人は、ぜひ「コミュニティ・レストラン公開講座」にご参加ください。

世古 一穂

(せこ かずほ)
京都市生まれ。神戸大学文学部哲学科(社会学専攻)卒業、大阪大学大学院工学研究科博士課程後期修了。NPO 法制定に尽力。1999年人材養成を専門とする(特非)NPO 研修・情報センターを設立、代表理事。コミュニティ・レストランネットワーク代表。多摩大学、東京経済大学の講師。地方制度調査会委員(総務省)など。『協働のデザイン』学芸出版社『市民参加のデザイン』ぎょうせいほか多数。「つぶやきを形に、思いをしくみに」をモットーに参加協働型社会づくりに向けて研修、調査、研究活動を行っています。



「DESD 国際実施計画」が確定へ

ユネスコが策定をすすめてきた「DESD 国際実施計画」が、2005年9月のユネスコ第172回理事会で採択される見通しとなった。

この理事会に向けて公表された国際実施計画の改定案は、これまでのドラフトで具体的に記述していた事項の多くを削除している。とくに、各国政府がとるべき措置に関する記述がほぼ全面的に削除され、各国政府が施策をすすめるときに考慮すべき要素についての言及にとどめている点は、これからの「DESD 日本実施計画」の策定にも少なからぬ影響を与えるものと考えられる。

また、「持続可能な開発 (SD)」に関する記述をほぼすべて削除したこと、ESDの代表的な例示とも言える15項目に関する記述を削除したこと、個別の機関やプログ

ラムに関する具体的な記述を削除したことにより、国際的な指針としてはかなり漠然としたものになってしまったように感じる。ただ、日本も含めて各国での実施計画の策定が遅れている大きな要因に、その指針となる国際実施計画が確定されていないことがあったことを考えれば、この10月以降、各国における実施計画の策定作業が本格化していくものと期待される。

「DESD日本実施計画」策定に向けて

DESD (ESDの10年) は、これまで外務省地球環境課が日本政府側の窓口となってきたが、この9月より日本実施計画策定に向けた担当者が就き、体制の強化が図られたようである。

今後、各省庁がどうまとまって政府内の体制を整えていくかは明確ではないが、外務省の動きなどをみると、体制づくりも本

格的にすすみそうな期待がもてる。さらに、国際実施計画が確定されれば、政府は2005年中に、極めて短期間で日本実施計画を策定することになるだろう。

ESD-Jとしても、こうした国内外の動向を受けて、日本実施計画策定に効果的な役割が担えるように、タイミングを逃さずしっかり動いていきたい。ESD-Jでは、より多くのNPOや市民・企業などの声(民意)が、日本実施計画策定に活かされるように働きかけていきたいと考えているので、みなさんのご意見ご提案をどしどしESD-J事務局へお送りいただきたい。

* DESD(ディーイーエスディー)とは、Decade of Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育の10年=ESDの10年)の略語です。

池田 満之 (いけだ みつゆき)

ESD-J副代表理事(政策提言プロジェクトチームリーダー、兼DESDガイドライン策定検討委員会委員)、岡山ユネスコ協会理事、旭川流域ネットワーク世話人、(株)環境アセスメントセンター西日本事業部代表取締役。

アジア ESD 交流レポート

韓国編

8月21日から9月2日にかけて、国際交流基金が主催するアジアNPO派遣事業の一環として、ESD-J理事・会員・事務局スタッフから成る7名のチームが、韓国・インドネシア・タイでESDを推進、実践する団体や現場を訪問し、情報や意見の交換を行いました。今号では韓国、次号ではインドネシア・タイでの状況をそれぞれ報告します(詳細はESD-Jウェブサイトを参照)。

韓国では22~25日にかけて下記団体の方々とお会いし、忙しい日程のなか、多くの収穫を得ました。

韓国 LA (ローカルアジェンダ) 21 協議会 グンポ市 LA21 協議会

これまでの環境の視点に加え、社会の公平性・人権・平和・文化など多様な課題認識が広がり、韓国 LA21 協議会では最近、「ESD 分科会」を設立した。今後の動きに期待が高まる。グンポ市 LA21 協議会では、地域における実際の取組みを紹介いただき、市民提案により実現しようとしている「生態公園」建設予定地などを見学。

ユネスコアジア太平洋国際理解教育院

ESD と国際理解教育をどのようにつなげ実践していくべきか、国際会議や機関紙などを通じ、議論や実践支援を展開中。「どのような持続可能社会が必要か」は地域により異なるのが当然であり、多様な地域社会を抱えるアジア太平洋地域はとくに多様性を重視、発信せねばならないとする院長のご意見に共感。

韓国持続可能な開発大統領委員会 (PCSD) 国際協力・教育委員会

委員は NGO 関係者、小中学校教員、大学教授、宗教者など、多様な顔ぶれ。2~6月にかけて実施した「ESDの10年のための国家推進計画開発研究」の報告を検討したうえで、今年末に策定予定の持続可能な開発に関する国家総合計画のなかに反映させていきたいとのこと。今後の課題として、このような計画と教育現場との距離解消、計画の実施における多様な人々の参画、教育や環境など関連する分野の省庁・行政の連繋、ESDを推進する本部や地域センターの設立など実行体系の構築、が挙げられた。

韓国環境運動連合

韓国最大手の環境市民団体。「代案なしの反対運動」を脱却し、地域における「持続可能な発展」の具体的なモデルをつくりだしていくことが課題との話から、そのためにこそ地域住民が「ESD」で力をつけ、地域に合った発展を生み出していくことが必要、という意見交換を行った。さらに、江華(カンファ)島で、環境運動連合が江華郡、仁川市と協働運営する干潟教育センターを見学。干潟保全と同時に、地域住民との協力による地域発展をめざすが、人々の参画をどうすすめるかが課題とのこと。

麻浦生協

地域発 ESD の事例。ソウル郊外麻浦地区の母親たちが発足した生協が、「ソンミ山」開発計画反対運動を経て、地域の人々を広く巻き込む組織

今年のESD地域ミーティングと 開催後の動き

～板橋ミーティングを例に

今年の地域ミーティングは、6月4日徳島（四国 NGO ネットワーク主催）、9月3日板橋（ボランティア市民活動学習推進センターいたばし主催）を皮切りに、三重、岩手、旭川、大阪泉北などで開かれる予定である。ESD-J 地域ネットワークプロジェクトチームとしてはこのほかに、日野、松戸、香川、高知、鹿児島、石川などに働きかけていきたいと考えている。やりたいと考えている方があれば、至急事務局に連絡を。

月2回の連続フォーラムを開催

地域での取組みの一つの方向性を示すものとして、板橋ミーティングの内容を紹介したい。

板橋では、すでに2年前からESDの取組みが主体的に行われてきた（本紙 vol.3 参照）。本当に、毎月毎月、市民の手で学びが積み重ねられてきた。3年目を迎える

今年は、それを基盤にく未来のための学びのネットワークづくり挑戦しているとしていく。

そのための場として、9月13日から月2回、計12回にのぼる「ともに創る未来のための学びのネットワーク連続フォーラム」が行われる。ここでは、これまで板橋で展開されてきた「総合的な学習の時間」の地域によるサポート、コーディネート活動や人権学習プロジェクト、板橋100人村などの市民による学習や保健福祉の10年計画、災害時の助け合いシステムづくりとESDとのつながりが検討される。

さらに、行政の各部署（企画、総務、環境、国際、教育委員会など）や議員、区長と、自治体としてESDをどう取り組むかが話し合われる。

そこでこの全12回の学びをつなぐ視点を共有しようと、板橋ミーティングが設定された。ゲストは、新潟でボランティアや

総合学習に取り組む市嶋彰さんと、大阪府和泉市で部落解放運動や人権教育の新しい展開を基盤に、地域のNPOのネットワークづくりをコーディネートしている広瀬聡夫さん。2人はそれぞれボランティア市民活動の豊かさ、世界とつながる視点を熱く語り、参加者のフォーラムへの思いを高めてくれた。今後の広がりが楽しみだ。

連続フォーラムの問合せ先:

ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし

TEL&FAX: 03-5943-1888

Email: gakushu-itabashi@nifty.com

森 良 (もり りょう)

ESD-J 地域ネットワークプロジェクトチームリーダー。子どもたちの自然教室のボランティアを10年、環境教育・まちづくりをサポートするNPOを12年やってきた。これからは日本とアジアの地域でのコーディネーターの育成に力を注ぐ。NPO 法人 ECOM 代表。

ESDアジアネットワーク 戦略会議を開催します

国際ネットワークプロジェクトチームでは、昨年アジア太平洋地域におけるESD推進に向けた国際ネットワークの構築に向け、準備をすすめてきました。そしていよいよ9月24・25日の2日間、アジア各国のESD推進にかかわる実務者による戦略会議「ESDアジアネットワーク構築に向けてーアジアにおけるESDネットワーク形成の戦略と行動計画づくり」を開催します。

戦略会議には海外ゲスト6名（すでに政府などマルチ・ステーク・ホルダーによるESD推進を実践しているフィリピン、インド、韓国のほか、バングラディッシュ、タイ、中国のNGO）と、国内のESD-J関係者など約20名が参加します。会議では、国際ネットワークに期待することを確認し、経験交流や協働などをすすめる具体的なアイデアを出し合い、行動計画を議論する予定です。

そしてこのメンバーで、9月25日午後16時に公開シンポジウムを開催します。ここでは海外ゲストから各国におけるESDへの取組み状況をご報告いただくとともに、戦略会議の成果を報告し、ESDに関心をもち、共に取り組む仲間を募りたいと思います。みなさまのご参加を楽しみにしています。※場所や参加費などのご案内は最終ページをご覧ください。

中島 美穂 (なかしま みほ)

映像で環境・社会問題を啓発する市民団体、TVE ジャパン勤務を経て、今年4月に慶応大学政策・メディア研究科入学。ESD-J 国際ネットワークプロジェクトチーム所属。



麻浦生協で活動を聞く。放課後には子どもたちが集まってくる。

に成長。まちのFM局、組合型車修理センター、議会監視や社会的弱者支援に取り組む麻浦連帯、都市型「生態村（エコビレッジ）」実現の取組みなど多角的な活動につながっている。昨年は、受験戦争に追われる従来学校教育への代案として「地域社会のための地域社会による学校」（小中高）を開設。

地理的に近く、文化的にも多くの共通点をもつ韓国と日本。ESDの推進を実現するなかでも多くの課題を共有しており、今後お互いの経験を分かち合い、アイデアを出し合い、共に取り組んでいくことが大きな力になると実感できました。一方で、市民運動を支える人々の意志や情熱、これまでの運動の歴史、ESDに関する民・官の協働体制など、韓国から日本が学ぶべき点も多く認識しました。今後、ESDの効果的な推進に向けた交流と協力をすすめるため、「日韓ESDワークショップ」の毎年開催など、ぜひ具体的な動きにつなげていきたいと考えています。（二ノ宮リムさち）

鹿児島大学の公開講座で「ESD レポートを読む会」開催中です

▼実践の共有がなにより大切

ESD-J事務局の呼びかけに応じるままに、「ESD レポートを読む会」をこれまで鹿児島で4回開催しています。「読む会」をなぜ開くのか。よくよく整理してみると、「私が勉強したい」「仲間をつくりたい」「身近なところで実践を始めたい」「ESDを広めたい」の4つの願いを形にしていく。そんなきっかけづくりに用いているように思います。

最初の2回は、私が鹿児島に赴任してすぐのこともあり、今後鹿児島でESDを広げていく可能性がどこにあるのか。とりかかりとして「読む会」を口実に、ゼミの学生や同僚、学外の知り合いに声をかけ、一緒に考えてもらいました。その際に感じたことは、ESDは実践が伴わなければ理解してもらえ

ない。実践の共有がなによりも大切だということでした。そのための方法は二つ。一つは、身近な実践を自ら(一緒に)つくっていくこと。二つは、既にある活動をESD実践として捉えなおし(再評価し)、それを共有していくことです。

▼ゲスト講師を呼んで継続的に運営

その両方の実現をにらんで、第3回以降から「読む会」を、鹿児島大学の公開講座に組み込んで実施することにしました。公開講座にのせるメリットは、①広く県内に広報できる、②活動の担い手を講師に迎え、ESDの土俵で実践が学べる、③計画的・継続的に会が運営できる、④仲間づくりに必要な議論の積み上げ、共通認識の醸成が容易

になるなどを挙げることができます。

初回のゲスト講師は、環境ISOに取り組む大学生協の専務理事・小林隆生さん、2回目は、ダイオキシンを町から追放した川^{かわ}辺町の企画課長・亀甲俊博さんでした。前半40分は話を伺い、後半は参加者で意見交換する形式をとっています。

今は、とにかく固定メンバーを少しずつ増やしていけるよう、継続が第一です。月に1回程度、出入りが自由な情報交換の場・学びの機会を提供する。緩やかなフォーラムをイメージした運営ですが、ただ最近では、参加者の関心やニーズに応じて、会の性格や目的を改めて見定めていく必要性を感じています。(レポート:小栗有子)

ESDに期待します!

松下電器産業株式会社 社会文化グループ 小西 ゆかり

とどまることを知らない経済のグローバル化により、社会課題・環境問題はボーダーレス化・グローバル化の果てに、その解決には地球規模での取り組みが求められています。「持続可能性の実現」には企業の、とくにグローバル企業の果たす役割が重要であると認識しています。

「企業は社会の公器」。創業者が企業の社会性について言及した言葉で、弊社の経営理念の根幹を成しています。松下電器グループでは「地球環境との共存」「社会福祉・共生社会」など幅広く活動して参りましたが、そのなかでもとくに「教育・人材育成」に力を置いてNPO支援プログラム・社員啓発プログラムなどの社会貢献活動を展開しております。

さまざまな社会的課題の解決のために教育の果たす役割はますます重要になってきており、今年から「持続可能な開発のための教育の10年」の取り組みが始まったことはたいへん有意義であると認識しています。「Think Globally, Act Locally」。言い古された言葉かもしれませんが、この言葉の重要性は普遍です。持続可能な開発の実現に向けて、ESD-Jの活躍に期待すると同時に、賛助会員として弊社も特色のある活動を地道に、着実に取り組んでいく所存です。



小西 ゆかり (こにし ゆかり)

1982年に松下電器産業(株)に入社。入社以来、法務業務を担当してきたが、本年4月に社会文化グループグループマネージャーに就任。座右の銘は、「積極的すぎることはない」。松下の社会貢献活動の顔となるべく、必死で勉強中です。

のまち
私がESD-Jに
入ったわけ

岡山市として入会しました

岡山地域 ESD 協議会 内藤 元久

岡山市では、環境、国際、男女共同参画をはじめさまざまな市民活動、教育活動が行われています。それらを踏まえ、2002年の環境開発サミットで開催されたユネスコ主催のサイドイベントで岡山市の市民の取り組みを紹介したことを契機に、各教育機関や行政、市民団体、事業所などを交えた ESDに関する取り組みを地域で考え始めました。本年4月には、それら関係者により「岡山地域 ESD協議会」を設置し、6月には、国連大学が提唱する地域の拠点(RCE)に認定されました。現在、環境と国際理解の活動分野を軸に、ESDについての周知、学習会や研修会の開催などを行っています。

ESD-Jには、2005年3月のキックオフミーティングに前市長が参加した際に、「岡山市」として加入しました。ESD-Jの池田副代表からの紹介もあり以前からお付き合いがあったのですが、今後の岡山地域におけるESDの推進のため、他地域、各分野のみなさまとの情報交換が有意義と思い参加しています。

岡山地域の市民はもとより全国のみなさまと持続可能な地域づくりの推進に向けて一緒に歩んでいきたいと考えていますので、今後ともよろしくお願ひします。

内藤 元久 (ないとう もとひさ)

岡山市環境局環境保全部環境調整課長。岡山地域 ESD 協議会事務局長。昭和52年岡山市に技術職(化学)として入庁。公害課に配属される。以来、ほぼ一貫して、公害、環境保全部門を歩む。平成13年4月から現職。



ESDを 知ろう



UNESCO ESD マスコット「DDくん」

グローバリゼーション（グローバル化）

「globe(地球)」からつくられた造語で、人間の諸活動が時空間を超えて地球規模になること。1990年代以降、私たちの生活に多大な影響をもたらしている。国境を超えた交流や情報の流通などが盛んになる一方、経済のグローバリゼーションは国際貿易や国際投資の拡大を招き、先進国と途上国の格差が増大。格差を是正し、環境を保全し、人権を擁護するための国際的なルールづくりは不十分な状態にある。すべての人が安心して安全な暮らしを営む権利を守ろうと「人間の安全保障」の概念を国連が打ち出したのも、こうした背景による。(上條直美)

ESD 基本用語集 vol.5

ESD を読み解くためのキーワード。
こんな言葉も実は ESD につながっているのです。

地元学

外からの変化・影響を受けつつ、地域の将来をどこへ向かって、どのように創造していくのか。その意思決定を図っていくための資料（判断材料）を地元の人の手で作って上げていく視点と方法の両方をさす。調査の対象は、地域固有の自然、風土、伝統、文化（技術を含む）、歴史であり、重要なことは、調べたことの意味や問題の捉え方、将来に生かす方法をよく考え、地域独自の生活文化を日常的に創り上げていく行為が伴うことである。(小栗有子)

学校と地域の連携（学社連携）

1990年代後半から、地域における教育参加、学校参加がますます注目されるようになった。学校運営に地域の意見を反映させる仕組みはすでに制度化されつつある（学校評議員制度、地域運営学校など）。学校が地域に開かれることで、地域の人材や自然環境を活用した教育実践が期待される。一方で、一部の声の大きな人たちに学校経営が左右され、弱者のニーズが無視されてしまう可能性や、地域のかかわりが校長や学校の求める範囲での、限定的なものになりがちなこと、といった課題点も指摘されている。(野田恵)

ESD 関連の本

持続可能な社会のための環境学習 —— 知恵の環を探して

木俣美樹男・藤村コノエほか著、培風館発行

「持続可能な発展」「人と自然の共生」「ゼロエミッション」「循環社会」「環境秩序」。さまざまな言葉を駆使し、17人の執筆者らが生々しく「持続可能性」を説いている。学者、官僚、企業人、運動家ら多彩な顔ぶれ。ゴミから地球を論じ、あるいは生態系として現代を描き、さらには古今東西の物語をひいて人間社会のありように言及する。損保ジャパン環境財団の北村必勝氏による「経済と環境」の章など就職を前にした学生らはぜひ読むべきだ。ESDの幅と奥行きを示す「本格的な入門書」。(大前純一)

● A5判、275頁、2,310円（税込）、2005年4月

● 購入方法：全国の一般書店へ



持続可能な未来のための学習 Teaching and Learning for a Sustainable Future

ユネスコ著、阿部治・野田研一・鳥飼玖美子監訳、立教大学出版会発行

本書はユネスコによって開発され、ヨハネスブルグサミットで発表されたESD教材であり、原書はユネスコホームページ上で公開されている。内容は以下の3部で大別できる。「持続可能な開発」およびESDに関する解説（基礎編）、ESDとしての消費者教育、市民教育などのあり方（方法編）、女性や文化、宗教、農業、観光などとESDとのかかわりを豊富な事例をもとに解説（事例編）。質・量共に極めて充実した世界初のESDテキストであり、現時点での国際標準といえる。ESDに関心のあるすべての人びとに必携の書。(阿部治)

● B5変型判、372頁、7,980円（税込）、2005年3月

● 購入方法：全国の一般書店へ。もしくは、書名、必要部数、送り先を明記のうえ、有斐閣アカデミア（FAX:03-5215-5263）へ（その場合はESD-J会員特別価格あり。6,800円、送料無料）

ESD-J だより

ESD-Jは「国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」を追い風に、持続可能な社会の実現に向けた教育を推進するため、2003年6月に設立されました（2004年12月、法人格を取得）。環境・開発・人権・平和・ジェンダーなど、社会的・教育的課題に関わるNGO・NPOや個人の動きをつなぎ、大きな力とていくことをめざす、ネットワーク団体です。今年より「ESDの10年」がはじまりました。これからの10年間で、どのようにつづいていくか、一緒に考え、取り組んでいきましょう。

2005年夏の活動報告

6月4日 ESD 地域ミーティング in 徳島を共催

「地球が「せこい」!? 今地域から国際協力を～持続可能で公平な世界をつくるため四国からできること～」をテーマに、四国 NGO ネットワーク主催の地域ミーティングが、徳島で開催されました。

6月8日 ESD 岡山円卓会議を開催

3月のキックオフミーティングに続く、第2回目の円卓会議。ESDを先駆的にすすめる岡上で、地域の現実からESD推進のための議論がなされました。市長をはじめ、国連大学、環境省、メディア、企業が参加しました。

6月12日 2005年度第2回理事会 / 2005年度通常総会を開催

2004年度事業・決算について報告をし、2005年度の事業計画および予算、細則について承認をいただき、中長期計画について議論しました。

6月28-29日 アジア太平洋地域 ESD の10年開始記念式典およびシンポジウムに参加
ユネスコ・国連大学の主催、ESDの10年開始記念式典とそれに続く国際シンポジウム「地球と未来を支える教育ーグローバルゼーションと持続可能な開発のための教育ー」が名古屋大学で開催されました。ESD-Jは、NGO紹介ブースに出展のほか、分科会「地域のイニシアチブ」に、竹内理事がコメンテーターとして参加しました。

7月4日 PTリーダー会議開催

各PTの事業進捗状況に関する共有のほか、今後のESD-Jの事業のすすめ方・方向性、来年度以降の組織のあり方、中長期ビジョンについて話し合いました。

7月28日 岡山市 ESD 研修においてワークショップを受託実施

岡山市 ESD 協議会主催の地域に担い手を対象とした ESD 研修において、参加型で ESD について考え交流するワークショップを実施しました。

8月21日～9月2日 国際交流基金アジア NPO 派遣に企画協力・参加

国際交流基金・アジアNPO派遣事業に企画協力し、ESD-J理事・会員・事務局スタッフの7名が韓国・インドネシア・タイでESDを推進、実践する団体や現場を訪問、今後のネットワーク構築に向けた情報、意見交換を行いました。

協力・後援事業

【特別協力】国連・持続可能な開発のための教育の10年「ずっと地球と生きる」学校プロジェクト 2005年4月～2006年3月末
日本ユネスコ協会連盟・読売新聞社主催（詳細）<http://www.unesco.jp/topics/esdgakkou.pdf>

【後援】『言の葉さらさらプロジェクト』2004年7月～9月末
（詳細）<http://www.kotosara2025.jp>

お知らせ

国連持続可能な開発のための教育(ESD)の10年 アジア ESDネットワークシンポジウム

～それぞれの経験からみんなの経験へ～

アジア各国の持続可能な社会の実現へ向けた活動を報告し、アジア地域における ESD 推進のためのネットワークづくりにつなげます。詳細は ESD-J ウェブページをご覧ください。

日時：9月25日（日）14：00～17：00

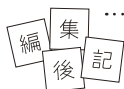
場所：JICA 国際総合研修所 国際会議場（東京都新宿区西本町10-5）

主催：NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）

共催：立教大学東アジア地域環境問題研究所、NPO 法人開発教育協会（DEAR）

参加費：ESD-J 会員 1,000 円、非会員 1,500 円 定員：100 名（先着順） 言語：日英同時通訳

お問い合わせ・お申し込み：ESD-J e-mail：symposium@esd-j.org（通常の事務局メールアドレスとは異なります）
この事業は、一部、国際交流基金の助成を受けています



最近の味噌は上品なので、おだしにそのまま溶かしてもツーンに飲める。でも、麦味噌の本場九州では、荒くれもの麦粒や豆粒のカスを取り除く「みそこし」が使われるという。味噌を漉すがごとく、地域の教育資源を精錬する営み。2頁「みそこし応援団」の名のもう一つの由来です。（伊藤伸介）

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

URL <http://www.esd-j.org/> e-mail: admin@esd-j.org

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-10-15 ツインズ新宿ビル4F (社) 日本環境教育フォーラム内

TEL: 03-3350-8580 FAX: 03-3350-7818

● 会員募集中：正会員（10,000 円）、準会員（3,000 円）詳しくは HP をご覧ください ●



発行：NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 編集：ESD-J情報共有プロジェクトチーム レイアウト：河村 久美

この冊子は地球環境基金の助成により制作されています



団体正会員

- (財)アジア・太平洋人権情報センター（ヒューライツ大阪）
- (財)アジア女性交流・研究フォーラム
- (財)オイスカ
- (財)キープ協会
- (財)京都コースホステル協会
- (財)グリーンクロスジャパン
- (財)日本自然保護協会
- (財)日本野鳥の会
- (財)日本ユニセフ協会
- (財)日本YMCA 同盟
- (財)ボーイスカウト日本連盟
- (財)野外教育研究財団
- (財)ユネスコ・アジア文化センター
- (財)ガールスカウト日本連盟
- (財)日本環境教育フォーラム
- (財)日本ネイチャーゲーム協会
- (財)日本ユネスコ協会連盟
- (財)農山漁村文化協会
- (財)部落解放・人権研究所
- 国立学校法人 筑波大学 農林技術センター
- 学校法人 日本自然環境専門学校
- NPO 法人 岩木山自然学校
- NPO 法人 ADP 委員会
- NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター（ECOM）
- NPO 法人 ECOPLUS
- NPO 法人 ECOVIC
- NPO 法人 開発教育協会
- NPO 法人 ガラ紡愛好会
- NPO 法人 環境市民
- NPO 法人 環境文化のための対話研究所
- NPO 法人 キーパーソン 21
- NPO 法人 くすの木自然館
- NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター
- NPO 法人 グローバル・スクール・プロジェクト（GSP）
- NPO 法人 国際自然大学校
- NPO 法人 コミネット協会
- NPO 法人 サイカチネイチャークラブ
- NPO 法人 自然体験活動推進協議会
- NPO 法人 持続可能な社会をつくる元気ネット
- NPO 法人 樹木・環境ネットワーク協会
- NPO 法人 人権 NPO ダッシュ
- NPO 法人 生態教育センター
- NPO 法人 タプラ ラサ
- NPO 法人 地球環境と大気汚染を考える全国市民会議（CASA）
- NPO 法人 地球の未来
- NPO 法人 D&D 夢と多様性
- NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティ
- NPO 法人 ドングリの会
- NPO 法人 ほっとねっと
- NPO 法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいたびし
- NPO 法人 やまぼうし自然学校
- Earth Guardian 倶楽部
- アースビジョン組織委員会
- エコテックノロジー研究会
- エコプラットフォーム東海
- えひめグローバルネットワーク
- 岡山市役所（東京事務所）
- 岡山ユネスコ協会
- OAK HILLS（オークヒルズ）
- オーシャンファミリー海洋自然体験センター
- 環境 NGO アジア環境連帯
- 環境・国際研究会
- くりこま高原自然学校
- サステイナブル・コミュニティ研究所
- 「持続可能な社会と教育」研究会
- 森林たぐみ塾
- スリーヒルズ・アソシエイツ
- 世界女性会議岡山連絡会
- 全国学校給食協会
- 仙台いぐね研究会
- 創価学会平和委員会
- 地域活動協働協会（LACA）
- 地球環境・女性連絡会（GENKI）
- 地球環境を守る会「リーフ」
- 地球市民教育総合研究所
- TVE ジャパン
- 帝塚山学院大学国際理解研究所
- とやま国際理解教育研究会
- 日本アウトドアネットワーク
- 日本環境ジャーナリストの会
- 日本ホリスティック教育協会
- ハーグ平和アピール平和教育地球キャンペーン
- 東アジア地域環境問題研究所
- ホールアース自然学校
- (財)木文化研究所
- (財)バースセンス研究所
- (財)プラス・サーキュレーションジャパン
- (財)現代文化研究所
- (財)ポップ

（2005年9月1日現在 計89団体）